

旬遊

第十五集

令和三年三月

序にかえて

森 邦彦

俳句を作って楽しもうというのが我々の会です。皆さんの作品を句会で批評し合い、その結果を二年に一度、句集という形にまとめています。今回で十五回目になりました。句遊会のような俳句を楽しむだけという人を江戸時代より、遊俳といったそうですが、句遊会は特定の指導者を置かず、まさにその通りの句作を楽しむ会です。

俳句は飛鳥から平安の昔に栄えた短歌、室町期の連歌の流れを汲み、それぞれに題材を得て江戸時代に形を成しました。いずれの文芸も五音、七音で構成されており、日本語が最も表現し易く、語音がきれいな詩の形になっていると思います。

日本列島各地で人々が生活を始め、文化が芽生えて縄文と呼ばれた時代、日本人は文字を持っていま

せんでした。しかし、各地の間には交流があり、各地の産物が広く流通していたようです。遠くの産物を求めるには、覚えやすく、間違えないことが求められ、今日の通信販売の通信の役割を果たしたのが、五音、七音でまとめられた通信言葉ではなかったでしょう。その後、文字がもたらされ、それを遊びとして楽しんでいきます。

小、中学校からの親友が松江の大学に勤め、地元の新聞社による連歌の会を主宰しており、その作品集をいただきました。前句を与えられ、それに合わせた付句がいろいろと面白い展開を見せています。俳句には五、七、五の形や季語という決まりはありますが、その中に様々な思いが織り込まれています。

この句集を見ていただいて、興味をお持ちになれば、ぜひとも私どもと一緒に、俳句を作って遊ばいせんか。

目次

虫すだく 生江沢五風 六

生江沢様ありがとうございました

春の雪 佐藤政百 一〇

家族のことなど 眞田宗興 一二

喜寿の餅まき 森邦彦 一四

空 中山知祐 一六

初音 大仲正敏 一八

秋茄子 石原克己 二〇

工場夜景 安井正浩 二二

冬の月 城戸崎雅宗 二四

平凡 川田勝美 二六

作

品

虫すだく

生江沢 五風

初空や富士のお山の神々し

初春やひとり酒飲みうとうと

侘助や茶室の主役楚々として

寒桜月のかげらの降るごとし

職退くもチヨコ届きたりバレンタインデー

甘き酒はしやぎとまらぬ雛の前

若草や木の間かくれのしびの色

雨あがり街行く乙女夏めきて

灯台のけしの花咲く海碧し

暗ければ蛍袋の灯をつくり

老鶯や茜雲負ふ古城かな

蝉時雨全山動く鬨の声

金魚売天秤棒に風涼し

漬物の秋茄子美ましよう一献

野分あと満天に星きらめきぬ

野分晴空美しき鳶の笛

枯れ色の破れ障子に猫の顔

月光の照しだしたる枯木立

生江沢様ありがとうございました

生江沢様にとって今回の句集が、最後となつてしまいましたが、白寿のお齡で「ひとり酒」や「秋茄子で一杯」などから、ついこの間までの健啖ぶりが、また、「街行く乙女に」目を止めおかれ、「月を愛でる二句」が掲げられ、本当に俳句を楽しみながら、俳句をお摘みにして、人生を謳歌してきたご様子が伺えます。

生江沢様は、この句遊会の創設者のおひとりで足から三十年の長きにわたり、いつも笑顔で句遊会の中心にいてくださいました。そして句会会場のご配慮、俳句の作句、選句そして味わう楽しみを教えてくださいいただきました。本当にありがとうございました。俳句で遊ぶ喜びを受け継いだ会員全員で生江沢様への追悼の心持を詠みました。ここに捧げます。

(佐藤政百 記)

追悼句

梅が香に抱かれ五風永遠の旅

佐藤 政百

最近の君の句良いと生さんが

眞田 宗興

風光る野を健脚の吟行す

森 邦彦

大隠居笑顔の奥の現代史

中山 知祐

寂しさの募る想いや涅槃西風

大仲 正敏

梅の古都薫陶授く翁偲ぶ

石原 克己

遺稿句のファクスで届く春隣

安井 正浩

仰ぎ見る先達逝きて春浅き

城戸崎雅崇

桜散りカラオケの声高らかに

川田 勝美

春の雪

佐藤政百

昼月を掠めてをりぬ冬桜

ラガーらの津波怒涛の攻め凌ぎ

侘助のたたずむ葉陰仄明かり

金縷梅や結はれ神籤のほつれかけ

はらわたに汽笛三度や春の雪

道産子の嘶きわたるリラ咲けば

風に色かたちありけり吹流し

夏場所や四股踏む脚の高く高く

鎌一閃蛍袋のはらはらり

腕に蚊のみるみる腹の赤くなり

草いきれトランシットの視野くもる

礫かと足下に落ちし兜虫

入道雲湖一飲にガブリ寄る

枝豆の飛んで一味逃しけり

新蕎麦や健啖揃いの匂遊旅

ふんわりと山茶花絨毯散り敷かれ

詐欺電話寝付けぬ夜の間隙間風

言問へば首を傾げてゆりかもめ

家族のことなど

眞田宗興

大宰府の梅の香りの令和かな

便利だが幸せなのか春令和

形だけの監査抜けたしフキノトウ

どこへ行くクルーズ船の春の旅

軽く診たコロナの付けや春霞む

春風を楽しんでいる白き富士

菜の花や我らを見よと線路沿ひ

亡き母や中野の駅を通るたび

八十歳花もコロナも踏み越えて

ドラマ見て正義感戻す夏なりき

父亡くて母亡くて弟よもう夏だ

神奈川宿梅雨はおりよものなみだ雨

桐一葉孫に言わずに済みしこと

鈴虫かいや耳鳴りかまあいいか

コロナ禍の電車の換気秋風が

もみじ葉の先に見えたり富士のやま

冬ビル街一軒家あり灯りあり

大晦日事件簿書くや妻の愚痴

喜寿の餅まき

森

邦

彦

初空に御所の築地を見越す松

数の子のぷちぷち友に一人酒

刈り揃え龍の空飛ぶ梅の庭

蓮華野に転び回りし幼き日

惜しまれつ淡雪消ゆる金閣寺

つくし生ゆ昔のひかり天守台

通り抜け八重の桜の鞠の如

癒えし眼に紅紫の花蘇芳

燕の子監視カメラに守らるる

山裾の故郷の墓は蝉時雨

朝まだき幹に艶やか甲虫

夏雲を抜けて帰国の孫笑顔

唐辛子かんずりに化けなほ美味し

新蕎麦に昼酒併せ句をひねる

村祭り喜寿の集いて餅をまく

急降下湖面の鯉を掴む鷺

金目鯛煮付け目をむく伊豆の宿

冬ざれに杉の木哀れ瑞巖寺

感動が人に伝わる句作は難しい。

吟行の様に景色を共有しているとか、合同展の写真句は楽しい。

空

中山知祐

初空の光へ未知へ今朝一步

三代で百人一首夢かなふ

初午や「笠森お仙」おもてなし

まんさくの金糸の仕付け庭かがる

チューリップ思わずステップ タン タ タン

藪白し馬酔木の花の薄化粧

走り去るバスの行方や吹き流し

卯の花を尋ねて万歩鄙の道

長谷寺も紫陽花盛り孫ちよこまか

甘酒が鄙の白酒母の味

切り分ける母の手元よ水羊羹

雷雲を逃げるママチャリ二人乗り

草原も空も我がもの赤とんぼ

ほほづきを鳴らす姉の目薄笑ひ

雁の列銀白夜空登り行く

新蕎麦や座りなおしてひとすすり

秋天をするどく突けるポプラかな

残像もゆらりゆらりと冬の蝶

初音

大仲正敏

初空に香港島の夜明けかな

首里城や災禍にめげず寒桜

荒れる海窓辺に咲ける冬薔薇

凍蝶の旅の終わりを思いつつ

空き家にも巡る季節の初音かな

国会やコロナに揺れて春寒し

夏場所ややぐら太鼓に屋形船

夏きざす三密を避けペダル踏む

にはか雨蚩袋と雨宿り

尾瀬の夢友と巡りし水芭蕉

秩父路の駅の改札蝉しぐれ

森の朝子らの歓声甲虫

中止せりほほづき市や涙雨

蝸や妻と二人の美術館

山小屋の人いきれ抜け夜露かな

新蕎麦や東京ナンバー峠越え

踊り子や紅さす宿の夕時雨

障子閉めお茶一杯の穏やかさ

秋 茄 子

石 原 克 己

玉砂利の踏む音届け初御空

まんさくや心浮き立つ北の国

露味噌や湯気の白米頬張りて

竹林に初音澄みきる古都の寺

釣り糸を波にまかせて春の磯

白酒の満ちて朱の杯雅やか

雪国も人に動きや春の雪

桜貝ひろふ少女の無垢の指

子供らが順待つ先の甘茶仏

山裾の彼方の農家吹流し

湯気も香も筍飯は大盛に

盆栽の植ゑ替へ終へり夏はじめ

夕闇にはかなく白き罌粟の花

坪庭の緑やはらか簾越し

コロナ禍の心の色か梅雨の空

来客に笹の葉敷いて水羊羹

秋茄子の色も一品朝の膳

鯛焼屋手際に見とれ順を待つ

工場夜景

安井正浩

初御空いつか見た空憶ひ出し

二ん月の赤いキリンが雲を追ふ

人知れず地蔵を飾るげんげの輪

豪華船ゆるりと航けり朧月

春日陰百人番所の深庇

ひこばえや災禍の跡の倒木に

花馬酔木風無き刻の揺れ重し

濡れてなほ彩香の増せり濃紫陽花

然りげ無く切り出す話水羊羹

故郷の絆はお墓蟬時雨

手術明日思ひは千々に髪洗ふ

逢魔が時カンナはふつと力抜く

群れてなほ孤を守らんと曼珠沙華

閉じ籠もる心を開く豊の秋

逝く人の葬儀叶わず虫すだく

秋麗九十九島を一望に

懐手解きて言ひ訳思ひつく

凍る空工場夜景煌めけり

冬の月

城戸崎 雅崇

初空にぽつかり白き雲ひとつ

澱むとも流るともなき春の川

大栈橋見下ろす丘の春の雪

ブロンズの装飾の窓花ミモザ

ふと動き出したるかとも春の星

風光る色鮮やかなスニーカー

夏草に園丁の姿埋もれて

河鵜さへ一本おきに杭の上

水羊羹ガラスの皿にすこし揺れ

ブロンズ像しとどに濡らす夏の雨

秋めくや芝に寝そべる二三人

傾斜地に墓標並びて昼の虫

自転車はコスモスの道一直線

散り敷きて命短し金木犀

高原のテニスコートにななかまど

梢には夕日が残り櫺紅葉

生垣を越すや越さずや冬の蝶

ものの影くつきり写し冬満月

リアル句会が減少し、リモート句会が増加してきました。
ステイホームで、そうではなくとも頭に浮かんでこない
俳句を作るのが、ますます難しくなってきました。

平 凡

川 田 勝 美

初空へサッカーボール高々と

ひと歩き万作開花春近し

燕たち戻つておいで軒下へ

おぼろ月ライトアップに浮かぶ寺

春光の鳶の鳴き声鎌倉駅

桜散り昭和平成遠くなる

夏場所や負けた力士を声援す

風薫る令和の響き心地良い

思い出や祖父の愛したアマリリス

炎天下診察前にカツサンド

思い出の高原に咲く千日紅

秋の宵考えすぎて悪手打つ

霧深し放牧の牛見当たらず

鴨一羽群れを離れて骨休め

冬の蝶庭木に止り弱わ弱し

懐手身分知らずと叱られる

霜柱自主トレ開始成果期す

バス待ちの俳句創作霜柱

あとがき

「句遊」第十五集をお届けします。
第十四集以降、令和元年、二年の句遊会の活動状況は次のとおりです。

月例会 令和元年十二回、令和二年十二回、計二十四回。

（このうち、五回は、新型コロナウイルス対応のため、通信句会で実施）
吟行 令和元年四月 皇居 東御苑
元年十月 あてま高原（一泊）

写友会、画友会との合同展

第三十一回合同展 令和元年 五月
第三十二回合同展 令和元年 十二月
第三十三回合同展 令和二年 五月
第三十四回合同展 令和二年 十二月
これらの活動等で生まれた作品の中から自選十八句、十名の出品です。

今号編集中の去る二月五日、生江沢広雄（五風）氏が急逝されました。生江沢様のご冥福をお祈りし、追悼句を捧げます。

令和三年三月

編集委員

森 邦彦
佐藤 政夫
石原 克己
中山 祐伸
安井 正浩（記）

一般社団法人
監査懇話会
句遊会
(代表 森 邦彦)